

《エッセイ》

## 「岡嵯先生の思い出」

平田 勇人

岡嵯修先生と言えば法哲学の分野では著名な法哲学者です。

岡嵯先生は、正直で、誠実で、決して驕り高ぶることなく努力し続ける立派な人格者であることは彼を知る人ならば誰もが認めることです。私はそうした先生をいつも尊敬してまいりました。おそらく、それは亡き御尊父の岡嵯格（おかざき・いでる）氏からの影響も大きいのではないかと思います。

亡きご尊父は、京都帝国大学法学部（末川博ゼミ）で民法をはじめあらゆる法分野を学び、司法試験で上位合格された超一流の法律家ですが、そのようなご尊父の下で、平等と公平の正義を追求すると同時に、均衡と調和に満ちた素晴らしい法哲学者になったのだと思います。

岡嵯先生は明治大学法学部から同大学大学院博士後期課程（単位取得）まで、基礎法学のみならず民法や刑法、行政法など緻密で高度な法律的トレーニングを受けられ、法哲学の分野で偉業を成し遂げられました。今回は岡嵯先生との会話を思い出しながら先生の思い出について書かせていただきたいと思います。

第一に、シンポジウムの語源を巡っての会話

今日、コロナ問題でオンライン会議などが当たり前になってきました

が、岡嵯先生のご存命であれば、人と人との対面の重要性を説かれると思います。

シンポジウムの語源は、古代ギリシャの「饗宴・酒宴」(symposion)に由来するとされていますが、プラトンの時代から一緒に酒を飲み交わしながら、議論することの重要性がいつの時代も説かれてきました。テレビで「居酒屋放浪記」という番組がありますが、岡嵯先生はこのテレビ番組が大好きだったそうです。岡嵯先生は大学院の授業の後で、恩師と一緒に神保町界隈の居酒屋で恩師とお酒を飲み交わしながら、さらに法律の議論を続け、そうした中で最も大切なことを恩師から学んだそうです。岡嵯先生と一緒に、朝日大学法学部の親しい同僚何人かと飲みに行っても、決してお酒に呑まれることなく、その論理的思考はますます冴えわたり、同僚の私たちと議論することを楽しみ、私たちはそうした中で多くのことを学ばせていただきました。岡嵯先生の圧倒的な知識の量と深さに驚きながら、法学部の同僚たちと侃々諤々と議論をしたのが懐かしい思い出の一つです。こうしたコミュニケーションを飲コミュニケーションということも先生から教わりました。

## 第二に、2値論理では割り切れないことを巡っての会話

岡嵯先生は、たまに現代数学の2値論理に批判的な見方をされてお話しされていました。

先生によれば、例えば現代民主主義社会では投票行為でその正当性が担保されている側面がありますが、賛成か反対かという2値論理では不十分だということです。ともすれば私たちは、賛成か反対かといった2値論理で考えがちですが、岡嵯先生は賛成でも反対でもない「白票」の重要性を説いておられました。

確かに、先生との会話が続く中で、今後、人工知能のIQがさらに5万レベル位まで到達するためには、演算の時間を飛躍的に短縮するため、2値論理から多値論理へと移行する必要があるようです。岡嵯先生

は、ユークリッド幾何学だけでなく、リーマン幾何学では「平行線は無限遠点で交わる」といった数学にも深い造詣があり、会話は多値論理から量子コンピュータへと進んでいきます。先生のお話はとても興味深く、時間が経つのを忘れるほどでした。

確かに従来のコンピュータ素子は、情報を「0 (= ない)」か「1 (= ある)」などの2値で演算を行うのに対して、量子コンピュータは「量子ビット」により「0でもあり1でもある」重ね合わせ状態によって情報を扱い、そのことが超高速演算へと繋がるわけですが、工学部や大学院工学研究科で学んだ経験のない先生が、大学レベルで学ぶ物理学の1つである量子力学について、独学でしっかりと、かつ正確にその核心を理解されていることに驚かされました。私は大学院総合理工学研究科で系統的に数理工学を学びましたが、ごく簡単に言えば、量子力学によると、物体が外から観測されていないとき、相反する状態が同時に実現され、これが「重ね合わせの状態」と呼ばれているものですが、量子素子は、1と0の両者の“重み”を自由に変えることができるため、「0 (= ない)」と「1 (= ある)」という2つの状態が同時に実現しており、このことを「白票」と例えた岡寄先生の数理的な能力に驚くとともに、もし先生が理科系に進学しても成功していると感じた次第です。先生が尊敬する法律家の一人、ロスコー・パウンド (Roscoe Pound) も大学で植物学を専攻して学士、修士、博士号を植物学で取得して理系で成功した後、類まれな記憶力と語学力を生かして、英語以外に、ラテン語、ギリシャ語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ロシア語を修得して、各国の法律文献を読破し、ハーバード・ロー・スクールの教授に迎えられた方ですが、パウンドの思考の根底には植物学の樹形図の思考があったと岡寄先生からお聞きしました。先生はもちろん原書でパウンドの著作を読み込まれていて、文系と理系の双方に通じている岡寄先生との会話は続くのでした。

第三に、Peter Stein 教授を巡る会話

かつて私は英国のケンブリッジ大学内の研究室で寝泊まりしながら勉強していた時、1階の私の研究室の隣に Peter Stein 教授がおられました。Stein 教授とは研究室が隣ということで大変親しくなり、Squire Law Library というケンブリッジ大学図書館を案内してくれたり、色々な偉い先生を紹介してくれたり、ずいぶんお世話になりました。この留学時代に私は、法の進化という見方や、そのプロセスを Stein 教授から直接学びました。そして、偶然にも Stein 教授が 1980 年に Cambridge University Press から出版された “Legal Evolution – The story of an idea” (『法進化のメタヒストリー』) の日本での翻訳権を Cambridge University Press から与えられた、今野勉・岡崎修・長谷川史郎の 3 名の学者が力を合わせて翻訳され、文真堂から翻訳本を出版されていることを知りました。その本を読めば、岡崎先生の英語力がどれほど素晴らしいかが即座に分かります（ご自身は決して自慢されないのですが）。翻訳文の流麗でいて、Peter 教授の思想が正確無比に翻訳されていることに、私は唯々驚嘆するばかりでした。Peter 教授は内容のない薄っぺらな流暢な英会話をとても嫌い、確かな法律の知識に裏打ちされた読解力と英作文、リスニング力（内容を理解して意識して聞く力）があって初めて会話すべきだと言っていましたし、Stein 教授の専門は、ローマ法ならびに比較法研究ですが、単に英語から日本語に翻訳するというレベルではなく、ラテン語やドイツ語を含む数多くの原典を正確に読み込まなければ到底、翻訳などできるわけがなく、そうした意味で、Stein 教授が翻訳権を認めた 3 人の先生の語学力は折り紙付きといえましょう。ということで、ケンブリッジ大学の Stein 教授の取り持つ不思議な縁を感じました。

以上、岡崎先生との思い出として 3 点、書かせていただきましたが、生前に先生から受けたご恩に深く感謝するとともに、先生のご冥福を心

から祈念しつつ筆を置きたいと思います。